

読んで見つける、新しい世界、新しい自分

読み物機関誌

# 青いスピーン

秋

2024  
第5号

葦原かも

町田そのこ

菅沼悠介

三木那由他

伊藤ハムスター

作品募集・入選作品

「裏道小道恋の道」

杉成恵佳



# 青いスピンの 目次

- 1 創作「野原はきらきら」 葦原かも
- 9 創作「月夜の散歩」 町田そのこ
- 16 作品募集・入選作品「裏道小道恋の道」 杉成恵佳
- 22 科学エッセー「冒険家と科学者の間に」 菅沼悠介
- 24 エッセー「気持ちと言葉」 三木那由他
- 27 コラム「しおりライブラリー」
- 28 イラストエッセー「学校あるある」 伊藤ハムスター
- 30 コラム「目で読むSDGs図鑑」
- 32 コラム「世界の友だちの一日」

「スピン」って、何だか知っていますか？  
本に付いている細いリボン、  
しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、  
ページにそっとスピンをはさんでおけば、  
またいつでも、

その本の世界にもどることが出来ます。

そして、「青」は、

青春や青空をイメージさせる色。

これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、

物語からノンフィクション、イラストエッセーまで  
さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、

あなただけの新しい世界を見つけてください。

# 野原は きらきら

あしはら  
葦原かも 絵・長田結花



少し強い風が吹いて、草がさわさわつ、と波打つ。穂を出したばかりのススキやネコジヤラシが、「おいでおいで」と私を呼んでいる。

野原の小道を外れて、胸ぐらいまである草の中に、私は入っていく。青い、草のおい。

すると、足もとから、キチキチキチツとバツタが飛び出す。大きなショウリョウバツタだ。小さいのは、一歩足をふみ出すごとに、何びきも飛び出す。

手を伸ばし、葉の上のバツタをさつとつかまえる。とんがった顔、赤い口もと。

「父さんたちは子どものころ、こいつをトンガラシって呼んでたんだ。ほら、口もとが赤いだろう。」父さんの声が、耳の奥に響く。

キチキチツツ。

ひととき大きな音を立てて、トノサマバツタが飛び出した。追いかける。だめだ、トノサマバツタは、簡単につかまらない。父さんと二人がかりでつかまえようとしても、難しかったんだ。

どうして今、私は一人でバツタを追いかけているんだろう。どうして父さんは、いなくなってしまうたんだろう。あんなに元気だったのに。

去年の十一月、父さんは倒れて病院に運ばれ、そのまま帰ってこなかった。

私は四年生になって、夏休みが終わっても、どうしたらいいか、分からないまま。

母さんは、パートから正社員になって、洋服を作る会社の仕事を頑張っている。私も、今は毎日学

校に行っているし、カナエやリナとも、笑ってしゃべっている。

でも、前とはちがう。景色が、どれも何だか白っぽく見えてしまう。

大好きだった山や野原や、川釣りにも行かなくなった私に、母さんは「市のたより」で見つけた、この「矢神川自然観察会」をすすめてくれた。

「私は虫とかへびとかいやだから行かないけど、風子は生き物に詳しいから楽しいかもよ。電話で申し込んであげるから。」

行ってほしそうな顔だったので、私は「じゃあ行く。」と答えていた。

さつきまでは、みんなといっしょに観察しながら歩いていたのに、一人で草の中にいる私。

あれ、涙がだだあ流れてる。たまに、こんなふうになる。止まらないよ。

さつきまでと、草がゆれた。目の前に、男の子が飛び出してきた。

「おい、おまえ、どこまで入っていくんだよ。みんなとはぐれちまうぞ。」

髪の毛がつんつん立って、日に焼けて真っ黒な顔。やけにぎらぎら光る目。……イノシシ太郎？

「何だよ、迷子になって、泣いてたのか。しょうがねえなあ、ほら、これ、やるよ。」

男の子が差し出した右手の指の間には、大きなトノサマバツタがはさまっていた。

「え、つかまえたの。すごい……。」

私は、親指と人差し指で、バツタの頭の後ろをつかんだ。じっと、顔を見る。四角い顔だ。

二本の指の間に、バツタの「飛びたい」という気持ちがいんじんといんじんと伝わってきて、思わず指をゆる

めたとたん、バッタは身をよじって、キチキツと飛び立ってしまった。

「何だよ、逃がすなよ！」

男の子は、があがあした声で怒鳴った。

「ごめん……。」

「ま、いっか。あんまり虫つかまえると、みんなにしかられるな。何たって、観察会、だもんな。」  
私は、くすつと笑った。

「んじゃ、行くぞ。もうすぐお昼だぞ。」

「うんっ。」

男の子と私は、かけっこをするように草の中を走って、小道に向かった。

会の代表の沢井さんが、にこにこして小道に立っていた。

「風子ちゃんの姿が見えなくなったから、ちょっと見にきたのよ。でも、テツといっしょだったのね。」  
母さんと同い年くらいの沢井さんは、モスグリーンのトレーナーにベージュ色のパンツで、自然にとけこんでいる感じがかっこよかった。

「母ちゃん、こいつ、迷って泣いてたんだぜ。」

「ちよつと、やめてよ。えつ、母ちゃん？」

「うちのテツは、風子ちゃんと同じ、四年生なのよ。」

こんな優しい感じの人が、このイノシシ太郎……テツの、お母さんだなんて。

「野生児だからね、何でもくわしいわよ。学校では、落ち着きがなくて、しかられてばかりだけど。」

「うるせえな。行くぞ。」

私たちは急ぎ足で歩いて、いちばん後ろのおじさんに追いついた。

「八木さん、何か見つけた？」

八木さんと呼ばれたおじさんは、うれしそうに言った。

「今日は、コガネグモのりっぱな巣を見つけたよ。いい写真が撮れたよ。」

大きなデジカメに写っている、黄色と黒のしましまのクモを見せてくれた。

今日の参加者は三十人ぐらいで、小学生の男子はいるけれど、ほとんど大人。おじいさん、おばあさんもいる。みんな、思い思いに足を止めて、虫や植物を観察したり、写真に撮ったりしている。お弁当のときも、自分が見つけたためずらしい草や虫、カエルなどを次々に報告し合っていて、聞いているうちに、時間があつというまに過ぎてしまった。

午後は、矢神川のそばまで歩いて行って、鳥の観察をするらしい。

この川の、もう少し下流で、父さんとよく釣りをした。私は、クチボソやハヤなどの小物釣り。父さんは、大きなコイをねらっていたっけ。

「おお、いたいた。」

と、があがあした声が聞こえた。

釣りざおを二本かついだテツだった。

「おい風子、釣り教えてやるよ。」

いきなり、何？ テツはもう、川に向かって歩きだしている。鳥の観察なんだけど……。

「みんなの見える所にいけば、大丈夫だよ。ほら、これ使えよ。」

「う、ありがとう。でもさ、教えてくれなくても、釣りできるよ。ハヤとか、よく釣ってたもん。」

「そうか、そんなら競争だ。」

流れの中に、しましまの浮きが二つ。どちらも、ちつとも引かない。

「うーん、練りエサじゃだめなのかな。」

「そうかも。赤虫がよかったかな。」

「でも、おまえ、投げ込むの上手だな。おまえの父ちゃん、釣り好きだったのか。」

「え、うん。……テツ、知ってたの？ 父さん、死んだこと。」

「ああ、母ちゃんに聞いたよ。おまえの母ちゃんが電話で言ってたって。」

「なあんだ、だから、かまってくれてるの？ お母さんに、頼まれて？」

「あほう。」

「あほうって何よ。」

「おれ、母ちゃんの言うこと聞くほど、ひまじゃねえ。おまえ、トノサマバツタつかめたしな、見どころあると思っただよ。おつ、引いてるぞ！」

私の浮きが、つんつん動いている。

「もう少し待て、あせるなよ。」

「分かってるよ。」

と、言いつつ、待てなくてさおを上げてしまった。「瞬ぐぐつと魚の重さを感じたけれど、ぱすんと外れて、逃げてしまった。」

「おい！ だから言っただろ。」

「そういえば、父さんにもよくしかられた。」

「風子は、いつも上げるのが早すぎるんだよ。もつと待たなくちゃ。」って。

しまった、泣きそう。私は、小さい子みたいに、両手を目に当てて、「うそ泣き」のまねをした。

「泣きまねすんなよ。お、ダイサギだ。見ろよ、向こう岸。」

目を上げると、白い大きなサギが、水面を見つめている。

サギは、さつと川に頭をつつこんだ。と思うと、二十センチもありそうな魚をつかまえて、かぶつと丸飲みにした。ところが、横向きに魚を飲んだらしく、首が石おのみたいにくらんでしまった。しかも、そこがびくびく動いていて、サギはちよつと困ったように頭を振っている。

「ひやはははははは。」

「あはははははは。」

私たちは、同時に激しく笑いだし、止まらなくなった。こんなに笑ったの、久しぶり。

笑いつかれて、やつと静まった。どうやら魚は、サギのおなかに入ったみたいだ。

「んじゃ、あつちに戻るか。風子にはもう少し、釣りの修行が必要だな。」

「テツこそ、釣れなかったじゃん。」

「ふん、次は本気で勝負するか。」

「いいよ、私、マイさお持ってくるからねっ。そしたら負けないんだから。」  
私たちは、ぎゃあぎゃあしやべりながら、みんなの所に行った。

「こら、静かに。向こう岸に、カワセミがいるよ。」

お兄さんが、望遠鏡を三脚さんきやくに立てている。

「お、見せて見せて。」

テツが、のぞきにかけて寄よっていった。私もついていった。

望遠鏡をのぞいてみると、茂しげみの中に、カワセミがいた。

こつちを見ている！ 胸が、きゅつとなった。羽に日が当たって、エメラルド色に光っている。

「きれい……。」

二、三秒だったのか、もつと長い間だったのか。カワセミと私の、時間が流れた。

望遠鏡から目を上げた。川の流れも、周りの野原も、何だかきらきらしている。まるで、「おかえり」つ

て、言ってくれているみたいに。

大きく、息を吸い込こんだ。体の中に、野原の空気がしゅうつと広がっていく。

(父さん、私はまた、この河原かわらに来ちゃったよ。見て、今度は、フナ釣ってみせるよ。)

風が、ひゅつと髪をゆらした。父さんの、いたずらみたいだった。

# 月夜の散歩

町田まちだそのこ

絵・竹浪音羽

葦原あしはらかも 児童文学作家。著書に「まよなかのぎゅうぎゅうネコ」、「うみのとしよかん」シリーズ、「どんなイチゴも、みんなかわいい」などがある。

伴坂初音の家から帰ってきた父陸郎が、天斗に「出かけるぞ。」と声をかけてきたのは、夜の十時を過ぎたころだった。弟の海は祖父母といっしょにもう寝ていて、母の由美子を見ると「二人でどうぞ。」と言う。天斗は本当は行きたくなかったけれど、しぶしぶうなずいた。外に出ると、ひんやりとした空気の中に土と草の匂いが混じっていた。ついこのあいだまでほこりっぽかったのに、みずみずしい。かすかに、虫の鳴き声も聞こえた。駐車場に止めた車の横をすりと抜けて道路に出た陸郎が「田んぼに、水が入ったな。」とつぶやいた。

「田植え前の匂いって、いいよな。」

陸郎がのんびりと言うが、天斗はそんなことどうでもよかった。「父さん、車で出かけるんじゃないの？」とぶつきたらぼうに聞いた。伴坂の家は、車でも十五分ほどかかる。陸郎は「行かない。」と短く言った。

「伴坂のところは、謝りに行くんじゃないの？」

「それはもう、済んだよ。」

「おれ、謝ってないけど。」

から、天斗は「女の子を殴るなんて最低だって、言わないの？」と聞いた。松山先生は「男が女に手を上げるのはかつこ悪いことなんだぞ。」と声を荒らげたし、校長先生は「男女なんて関係なく、手を出すこと自体が最低な行為だ。」と顔を厳しくした。

「あっちの方、歩こうか。」

天斗の質問に答えず、陸郎は広い国道ではなく田んぼが広がる方向を指した。天斗の返事を待たず、歩き始める。天斗は陸郎の思わくが分からないまま、その背中を追った。

空気が変わった理由が分かった。田んぼに水が流れ込んでいた。水路から、さらさらこぶこぶと水の音がする。いろんな匂いが濃くなり、カエルと虫の音がそこかしこから響いてくる。街灯の少ない道路だけれどやけに明るくて、見上げると大きな月が卵色の光を放っていた。

だんだんと、天斗は不思議な気持ちになってきた。ふだんは友達と自転車で通り過ぎるだけの場所が、全く別の顔をしている。生き物の気配がくつきりしていて、今

思わず言ったものの、天斗は謝る気などさらさらなかった。昼間も、松山先生や校長先生に何度も謝るよう促されたけれど、天斗は断固として、頭を下げなかった。「ごめんないさい」の「ご」の字も口にしなかった。

でも、謝らなきゃ済まない問題なんだろうなとも、天斗は思っている。伴坂に暴力を振ったのは、まぎれもない事実だ。自分のために謝りに行った陸郎が少し疲れたように見えるのはきつと、伴坂の家からこつてり責めないといけないのだろう。

「悪いとはこれっぽっちも思っていないけど、それでも父さんが謝れって言うなら、うそで謝ってやるよ。」

心の中であかんべをしながら頭を下げてやる。顔を上げたときには、伴坂の顔を全力でにらみつけてやる。想像するだけで、天斗は血がぐつぐつと温度を上げていく気がした。

「まあ、暴力は、いけないな。」

陸郎が空を仰ぐ。その声に非難めいた響きがなかったまで聞き逃していた音が大きく聞こえる。先を歩く陸郎の背中が、やけに広く大きく見えた。父さんはいったい、何のためにおれを外に誘い出したんだろう。

陸郎の考えていることが分からず、天斗はとまどう。

お説教なら、家のリビングでもよかったはずだ。どうして、わざわざ外に出ないといけないんだ。

「伴坂さん、天斗よりずいぶんと背が高かったな。」

つぶやくように言った陸郎の声に、天斗ははつとする。

「あー、うん。クラスでいちばんでかい。」と答えた。四月の身体測定で、伴坂は百六十五センチだった。天斗は、百四十二センチ。

「暴力はいけないことだけど、」

陸郎がぶつんと言葉を切る。それから「でも、勇気がいることだったな。」と付け足した。

「は？ 意味分かんね。父さん、怒んないの？ おれ、あいつのこと二回殴って、ケツも蹴ったんだけど。」

「怒られたいのか、君は。」

ふは、と陸郎が吹き出した。

「でも、覚えてるんだな。自分が人に振るった暴力がどういうものだったか。」

「別に、ただ、何となくだよ。」

本当は、違う。あの瞬間は無我夢中だったけれど、その後は自分が何をしたのか、何回も思い返したのだった。腕を振り回し、肩に一回、右腕に一回こぶしが当たった。伴坂が「ちびのくせに調子乗んな！」とつかみかかってこようとしたから、後ろに回って尻を一回蹴った。伴坂はそこで「ひどい！」と叫んでへたり込んで泣き始めた。いつもは偉そうに怒鳴り散らす伴坂が一年生の子みたいにくせめを頼りなく泣く姿を見て、暴力を振るった自分に気がついた。両手も、右足も、痛かった。

「覚えてるのは、いいことだ。それが嫌な思い出であればあるほど、君はもう暴力を振るおうとは思わなくなるだろう。いい抑止になる。」

先を歩いていった陸郎が、くると振り返った。

「親として、二度と誰かを傷つけてはいけないよ、と君

けんかをしたのかな、くらいに思っていたけれど、本当のところは全然違ったのだ。

下足箱の所で、伴坂が海に話しかけている姿を見かけたとき、奇妙な気持ちがあった。上級生が下級生に声をかけて面倒を見たり遊んだりすることはよくあることだけれど、そういう雰囲気じゃなかったのだ。隠れて見ているら、伴坂は海の前でぐねぐねと歩いてみせて「こんなふうには歩いてるんだよー？」とへらへら笑った。海の顔が泣きだしそうにぐつとゆがんだ瞬間、目の前が真っ赤になって、体の奥がぼつと燃えあがる気がした。気づけば、駆けだしていた。

「おれ、知ってるもん。海が三歳になって初めて歩いたとき、みんなでお祝いしたよな。母さんとばあちゃんがめっちゃ泣いて、じいちゃん神社にお礼を言いに行ってくるって言って。じいちゃん、海が歩けるようになりまますようにって、毎日お参り行ってさ。雨の日も、台風の日も。そういうの、ちゃんと知ってるもん。」

みんなで一致団結して海を応援して、祈って、みんな

に言うよ。どんな相手だろうが、暴力に訴えるのはよくない。二度としてはいけない。」

ぴんと張り詰めた、厳しい声だった。陸郎はふだんはあまり怒らない人だから、その声の鋭さは天斗の胸にぐつさり刺さった。立ち止まった天斗は、足もとに目を落とす。海とおそろいの黄色いスニーカーのつま先をじつと見つめた。

「でもな。海の家族としては、ありがとうって言いたい。」

陸郎が、声の緊張を解いた。天斗がちらりと目だけ向けると、陸郎は「海のために、戦ったんだよな。」と口角をそつと持ち上げた。

「……あいつは、海をばかにしたんだ。」

天斗の四つ下、今年小学一年生になった海は生まれつき足に障害があつて、左足を引きずって歩く。その歩き方がおかしいと言って、伴坂は海の前で誇張した歩き方をしてみせたのだ。

最近、海が泣きそうな顔をしていることがあったのを、天斗は知っていた。まだ学校に慣れないのかな、友達と

で喜んで、みんなで泣いて。そんなだいたいじなことが一気によみがえって、彼らが全部、伴坂に踏みつけられたような気がした。

海とは、いつもけんかをする。生意気だし、口が悪いし、欲張りでわがままで泣き虫だ。海にはみんな甘くて、それが腹立たしくてたまらない日はいくつもあった。大好きな弟とはとうてい言えなくて、一人っ子だったらよかったのにと思ったことだってある。

でも、悔しかった。耐えきれないほど、怒りが湧いた。そうだよな、と陸郎がうなずいた。

「おれは、天斗は海だけじゃなく、おれたち家族のために戦ってくれたんだと思う。家族のために立ち向かってくれた君を、おれは誇りに思うよ。」

陸郎が、天斗の手を取った。今もまだ少し痛む右手の甲にそつと触れる。

「家族のために勇気を奮ったことを、おれは叱ったりできない。」

大きな手のぬくもりに、天斗は少しだけほっとする。



陸郎が事情を全部分かってくれたことが、うれしかった。しかしそこで、はっと気づく。

「待って。どうして父さんが知ってんだよ？ おれ、先生たちにも、母さんにも、伴坂が海に何をしたのか言わなかったんだぞ。」

事情を話してごらんと言われたけれど、天斗は話さなかった。それは、海が嫌な思いをすと思ったからだ。先生たちに歩き方を笑われていたなんて話せば、海も事情を聞かれてしまう。それはとても悲しいことだろう。

「それはね、伴坂さんが謝ってくれたからだよ。」

え、と天斗は無意識に声が出る。

「謝罪した後にあちらのご両親とお話をしていたらね、私が悪かったって、彼女から話してくれたんだ。」

伴坂は両親と陸郎に、泣きながら告白したのだという。からかうと目を涙でいっぱいにする顔がかわいくて、それで何度も近づいていったこと。自分の中では「遊んでいる」つもりで、意地悪だとは思わなかったこと。

「話が大きくなってしまって、怖くなったみたいだった

らしい。天斗と陸郎は同じ方向を見る。

「見てごらん、天斗。月が二つある。」

陸郎が指差す先を見る。高い天と、水面が鏡のようになった田んぼの両方に、月が浮いていた。やさしい光がきらめいている。

きれいだ、と天斗は思ったけれど言葉として出てこない。身近な場所に、目を奪われる瞬間があるなんて思ってもみなかった。

「おれも子どものころ、友達を殴ったことがある。君みたいに家族を守るためじゃなくて、自分のプライドの問題だったんだけどさ。」

陸郎が頭をかいた。

「じいちゃんにこうして連れ出されて、叱られた。そのときおれに、じいちゃんが言ったんだよ。自分のために戦おうとした気持ち自体は、否定しないって。正しく怒れる人間になれよって。」

「正しく怒る？」

「そう。怒る気持ちは、なくしちゃいけない。今回、君

よ。でも何よりも、ふだんはおっとりしている天斗が怒ったことが、ショックだったんだって。」

「……先生たちに何があったのか話さないって言われたとき、伴坂は一言もしゃべらなかつたんだ。」

海の歩き方をばかにしていたとは言わず、しかし天斗が悪いとも言わなかった。泣き疲れた顔で、唇を一字に引き結んでいた。天斗はそれを、体の小さな自分に泣かされたことが悔しくてしゃべらないのだと思っていた。

「彼女は明日、海にきちんと謝ると言ってくれた。それを見てから、君も謝罪をするかどうか考えればいい。」

「……分かった。」

伴坂が本当に謝ってくれるか、分からない。でも、海のために謝ってほしいと天斗は思う。そんな気持ちを察したのか、陸郎が「大丈夫だよ。」と言った。

「彼女はちゃんと分かってくれてる。そうじゃなきゃ、自分がしたことを話してくれるわけないだろう。」

うなずこうとすると、ぐわあ、と大人の男の人のげっぷのような声が田んぼから響いた。大きなカエルがいる

は怒り方を間違えたけれど、気持ちは間違いなく正しかった。だからこれからは、正しい怒りを正しく伝えられるようになってほしい。」

天斗は陸郎の顔を見上げる。それから、目の前の二つの月に視線を戻した。

「……覚えておく。」

陸郎が、天斗の右手をぎゅっと握った。

「人に手を上げて、怖かっただろう。正しく怒るのは難しいことだし、しんどいもんさ。よく、頑張ったね。」

強く包まれた手が熱くて、痛い。「力が強いんだよ。」と文句を言おうとした天斗だったが、しかし口から漏れたのは嗚咽だった。

本当は、怖かった。本気で誰かを殴ったことが恐ろしくてならなかった。とんでもないことをしたと、思ってた。声を上げて泣く天斗の手を、陸郎は離さなかった。

二つの月だけが美しく輝く夜の中で、天斗の涙は陸郎以外誰も知らない。カエルたちが、天斗の声を隠すように高らかに鳴き続けた。

# 裏道小道の道

杉成恵佳  
絵・宮下和

車が一台通れるほどの狭い路地に、人が一人通れるほどの細い路地。

小学校低学年の頃、私は迷路のような道を歩くのが好きだった。放課後になると、友達と三人で探検ごっこをして遊んだ。

だけど、中学校に入ってからからは、自転車通学になったので、よく遊んだ路地に行くこともなくなっていた。

今日は部活もない日曜日。小学校から仲が良かった椿夕紗ちゃんが、いつしよにバレンタインのチョコを作ろうと誘ってくれた。

今年のバレンタインに、夕紗ちゃんは、ずっと片思いしている彼に思い切ってチョコを渡すらしい。そう決めてから夕紗ちゃんは、「断られたらどうしよう。」「オーケーもらえたらめっちゃうれしい。」と、気持ちが上がったり下がったり、ジェットコースターのような。私は、夕紗ちゃんの話聞き、メールを送った。

夕紗ちゃんは、「がんばれ。」と言う私を見て、にやりとした。

「ひとごとのように応援しないでよ。沙希だって渡しなよ。」

「いやいやいや。無理だから。」

急に脇役から主役に引つ張り出されそうになって、突っぱねた。

私は脇役でいい。主役にはなりたくない。大きな幅の広い幹線道路よりも、細い路地のほうがいい。

そんなことを思い出しながら、入り組んだ路地を歩く。薄暗いし、生け垣があつて窮屈だけど、大通りを自転車で行くより、路地を抜けるほうが近道なのだ。

夕紗ちゃんが、私にチョコを「渡しなよ。」と言う相手は、三人で遊んでいたうちの一人で、名前を和久隆一という。とはいえ、近頃では、部活も違うし、クラスも違う。顔を合わすことすらないときだってある。それでも、会ったときは、それなりに話をする。

気軽に話せる数少ない男子だからこそ、チョコを渡して、その関係が壊れるよりも、告白しないでそのままの関係でいるほうがいい。

まあ、夕紗ちゃんとのチョコ作りは楽しそうだし、作って和久に渡すときは「義理チョコ」ということにしよう。歩いていると、ぼったり和久と出くわした。

和久は「あ。」という顔をして立ち止まった。きつと、私も和久と同じような顔をしているに違いない。

「どうしたの？」

「いや、おれんちの猫が逃げ出してさ、探してんの。山田、見なかったか？」

「見てないよ。」

「そっか。」

眉尻が下がり、がっかりしている。

「名前……。確かキジトラのトラだったけ？」

「よく覚えてんな。」

猫と和久の関係は切っても切れない。私が和久をいいなと思うようになったのも、和久が必死にトラを守ろうとしていた姿を見たからだし。

「和久は猫好きだもんね。いっしょに探そうか？」

ふと口をついて出た。

音がした方を見ると、よその家の庭先に赤い首輪をしたキジトラがいた。キジトラは警戒しているのか、頭を低くして上目遣いに私を見た。

子猫のとき見ただけだから、目の前の猫が和久のトラなのか分からない。

希望を込めて、「トラ。」と呼んでみた。

すると、耳がぴくっと動いた。下がっていたしっぽが左右にくねる。

目を離すと、どこかへ行ってしまうような気がした。視線はそのまま、脅かさないようにゆっくりと背負っていたリュックからスマホを取り出す。

「トラ、赤い首輪つけてる？ 夕紗ちゃんの家裏の道にいる。」

素速くメッセージを打つ。

もう一度「トラ。」と呼ぶと、私に「興味がありませんよ。」とでも言うように、そっぽを向いて座った。

スマホをちらつと見ると、既読はついていて、でも、返事が来ない。違うのかな。でも、呼んだら座ったし。

「ここを通ってるってことは椿の家に行くんじゃないの？」

「連絡するし。ちょっとだけ遅れてく。」

「探してくれんのはうれしいけど、約束してるんなら、そっち優先しろよ。」

「分かった。じゃあ、見かけたら連絡するね。」

「おう。」

すれ違いざまに見る和久の顔が、見上げる高さにあることに、どきつとする。

トラが子猫だったとき、ほかの怖そうな猫を必死に追いついて、背の低い和久じゃない。

振り向くと、——狭く入り組んだ路地だ。和久の姿はもうなかった。

夕紗ちゃんの家は、次の十字路を左に曲がり、まっすぐ行った先だ。

和久はもう探した道かもしれないけれど、それでも気になって塀の上、屋根の上、庭先を見渡しながら進む。

リン リン

かすかに鈴の音がした。

もうちょっとだけ待とう。

そこへ、「トラ。」と呼ぶ声があった。

足音がしなかったから、びっくりして振り返った。

和久が立っていた。視線は、私じゃなくて、トラに。

見つけたのは私なのに、と猫にジェラシーを感じてしまった。

それも和久らしいけれど。

ミャオン。

猫にも気持ちがあるのだと分かるぐらい、うれしそうに声で鳴いた。

私の横を通り過ぎて、和久の足もとにまとわりついてる。

「ありがとな。」

「たまたまだから。」

気持ちよさそうになでられているトラを見ると、自分もなでたくなってきた。

「さわっていい。逃げない？」

「これだけ、ぐたつとリラックスしてるから大丈夫じゃね。」

しゃがみ込んで背中をこわごわさわった。

見た目は毛が硬かたそうなのに、さわってみると思っていたよりやわらかい。ふわふわしている。

さわり心地こころちを楽しんでいると和久が言った。

「山田。椿つばきとこ、行かなくていいの何か。」

「あ、そうだ。チョコ作りに行かなきゃ……って。」

はっと顔を上げると、和久と目が合った。

「チョコ？」

「いや、その。あの……。」

ここで、たとえ義理チョコであっても目の前にいる相手に渡すチョコを作りますとも言えないし、うそついて家族にあげるチョコを作るとも言えはいけど、やっぱりうそは言いたくない。どう言おうかと迷まよってしまい、しどろもどろになってしまった。

「確か、バレンタインに、男性だんせいから女性に贈り物ものをする国もあるんだよな。トラを見つけてくれたお礼れいに、おれから山田にチョコを贈る。」

「え、でも、見つけただけだし。」

「うまく作れたら。」

精せいいっぱいいの勇気を出して立ち上がって言った。

和久がどんな顔かおをしていたのか知らない。もう、どきまぎして彼の顔かおを見ることができなかった。

夕紗ちゃんの家に行くとき、遅おそかったねと言われた。そして、私の顔かおを見て何かあったと悟さとった夕紗ちゃんは、私の頭かぶをぐりぐりとかき回した。

チョコは無事に作れた。

作りながら、夕紗ちゃんにさっきの出来事を話していると、気がついた。

和久は、誰たれに渡すのか聞いたはずなのに、私は「うまく作れたら。」と返事こたえをした。和久からすれば、これは誰たれに渡すのか分からないのではないか。

自分自分じゃない誰たれかに渡すと思おもっているかもしれない。「どうしよう。」

と思うけど、さっきの和久の告白こひごひを聞いた後のちじゃ、どきどきしすぎてうまくしゃべる自信じゆんがなかった。

「見つけてくんなきや、一晩ひとばん二晩ふたばん帰かえってこないって心配し続けつづけなきやならないじゃん。」

さわやかな笑えみを向けられ、チョコをあげるという行為ことに、和久は「お礼れい」以外の特別かんじょうな感情かんじょうを持っていないように思えた。

「友チョコってことだよな。じゃあ、私わたしからも和久に渡すね。」

「友チョコじゃないけど。」

「お礼？」

「本命。」

「……！」

「山田は、作ったチョコ、誰だれかに渡すんだよな？」

こんなに鼓動こどうが速はやいのは、全速力ぜんそくりきで走はった後のちぐらいだ。これって、どうしたらいいの？

不意打ふい打ちちの告白こひごひに言葉ことばが出でずに息いきが詰づまる。

和久はすくっと立ち上がり、「じゃあ！」とだけ言うてその場ばを離はなれようとした。

空気が冷ひやたいのに、顔かほは熱あつい。返事こたえ。返事こたえしなきや。

二月十四日、バレンタインデー。

夕方、空そらがオレンジ色いろから紺色こんいろへと移うつりゆく中なかを、自転車じてんしゃをこぎ、家うちに帰かえった。

本命ほんめいチョコを持って、和久が来きると思おもうと、鼓動こどうが速はやくなっなっていく。

待まちっているだけでも緊張きんちやうするのにな、「本命」だと言いった和久はどれほどだったか。チョコをかうのだからって勇気ゆうきが要いったはずだ。

なのに、私は待まちっているだけ？ 本当ほんとうにいいの？

私は、スマホスマホを手てに取り、入れ違ちがいにならないよう「行くから待まちってて。」とメッセメッセージを打ち込む。

すぐに既読きよくがついた。

「分わかった。」と和久からメッセメッセージが来たのと同時に家うちを出でた。もちろんチョコを渡わたしに。あのとときできなかった、返事こたえをするために。

薄暗うすくい、勝手知かたてつたる路地ろぢを歩く。

小学生の頃、冒険とか探検という言葉が好きだった。そして、「冒険」に出かけると言うのは、友達と連れ立って近所の川や裏山へと出かけた。それは小学生の僕にとっては十分な冒険だった。

中学生になると部活が忙しくなり、近所の探検はあまりできなくなった。そのかわり、冒険や探検の本をたくさん読んだ。最初は宇宙を舞台にしたSFが好きだったが、そのうち昔の冒険家や探検家を書いたものを読むようになった。

特に植村直己という冒険家の本をよく読んだ。植村直己は登山家として有名になった後、北極とかグリーンランドのような氷の大地を冒険するようになった。最後はデナリ（当時はマッキンリー）というアラスカの山で遭難してしまったけれど、偉大な冒険家だった。

ほかにもたくさん冒険の本を読むうちに、僕もいつか南極や北極で冒険や探検をしてみたいと思うようになった。

地元の高校から関東の大学に進んだ僕は、国内だけでなく海外まで出かけて冒険的なことをした。いちばん大きなチャレンジは、大学を一年休んでカナダとアラスカを旅したことだ。十九歳になった僕は、初めて乗った飛行機でカナダのバンクーバーに降り立った。そして、自転車やヒッチハイクで

カナダ南部をしばらく回った後、北を目指した。ユーコン川というカナダからアラスカに流れるとても長くて大きい川をカヌーに乗って一人で下るのだ。

実際に見たユーコン川はとても大きく、そして北極圏を流れるだけにとっても冷たかった。カヌーにテントや食料を積んでこぎ出した僕は、ユーコン川の河原でキャンプをしながら数百キロを旅した。氷河が削った山々、寒冷な気候で育つ細い木々、ネイティブ・アメリカンの廃村、初めて見る景色が川の流れるに乗る僕の横を通り過ぎていく。僕の川旅は、途中でクマにキャンプを荒らされたりして怖い思いもしたが、まさに大冒険だった。

けれども、日本に帰ってきた僕は改めて思った。冒険家にはなれそうもないな、と。僕の旅には新たな発見はなかったし、植村直己ほどとんでもない目にもあっていない。

そのかわりに、旅先でたくさんさんのいろいろな風景を見るうちに、地球の成り立ちや、温暖化で地球の環境が変わっていくことに興味を持った。そして、僕が旅した北極圏や、さらに地球の反対にある南極は、地球の環境を知るうえでとても重要な場所だと知った。特に南極の氷（氷床とよぶ）が温暖化で融けると、その水が海に流れ込んで世界の海面を上昇させたり、海流を大きく変えることで世界の気候に影響を与えたりするらしい。けれども、南極の氷床が融ける仕組みやスピードはよく分かっていないようだ。

僕は今、「南極を研究する科学者」になった。毎年のように南極に出かけて、岩や氷の上を調査して、南極の氷床がどうやって融けるのか、地球環境がどのように変化するかを調べている。

冒険家でも、机の上や実験室だけで研究をする「みんなが想像するような科学者」でもないけれど、冒険家と科学者の間に、僕にぴったりの場所があったみたいだ。



東南極スカルプスネスにて。一番手前に映っているのが筆者。

気持ちというのは厄介やっかいなものです。私自身は自分の気持ちができる。でも、私が抱いだいている気持ちをそのままほかの人に見せることはできません。望遠鏡を使っても、心電図を取っても、脳のうの検査けんさをしても、そこに私の心が映うつし出だされることはありません。それでも、自分の気持ちについてほかの人に分かってもらわないといけない場面や、ほかの人の気持ちを理解りかいしないといけない場面があります。例えば、友達のふるまいにいらいらしてうっかり冷たく当たってしまったとき。なぜ私がそんなことをするのか相手が分からず、困惑こんわくしていたなら、自分の気持ちをきちんと相手に理解りかいしてもらう必要があるかもしれない。逆に、友達ともだちがなぜやけに自分にきつく当たるようになったのかを知りたいこともあるでしょう。他人に見せることのできない自分の気持ちをその他人に分かってもらいたいとき、私たちは言葉を使います。言葉を使えば、「私の好きな映画えいがをあなたがばかにしたから、いらいらしてしまった。」と自分の気持ちを説明したり、「どうして最近さいきんきついことを言うようになったの？」とたずねたりすることができます。きつとこの文章ぶんしょうを読んでいるあなたにも、そうした経験けいけんがあるかと思います。でも、言葉で気持ちを伝えるなんて、本当にできるのでしようか？ ここに哲学的な悩みなやみの種たねがあります。「哲学的」というのは、つまり「実験や観察くわんさつをしたり、科学技術かがくぎじゆつを利用りようしたりというのでは、解決かいげつのしようがない悩み」ということです。「じかに見る」ことのできない他人の気持ちについて、言葉による説明せつめいだけで確

実に知ることなんてできるのだろうか？」と悩むとき、その悩みは哲学的なものです。

ただしこれは哲学者ていしやうしか悩まない問題もんだいではなく、私たちが実際じつさいに直面じゆんめんするかもしれない身近な悩みでもあります。「できる限り精せいいっぱいに言葉を尽くつくしても自分の本当の気持ちは伝わらないのではないか。」「相手は言葉ではこう言いっているけれど、本心ほんしんはそれとは違ちがうのではないか。」と悩んだことがある人は多いのではないでしょうか？

この悩みについて、哲学がストレートな解決策かいげつさくを持っているわけではありません。自分の心を相手に確実に知らせる方法や相手の心をのぞき込む方法は、哲学を勉強べんきやうしても見つかりません。でもそのかわりに、哲学は私たちの思考しやうこうのくせを教えてください、ふだんとは違う考え方を指さし示しめしてくださいたりはします。例えば、「人と人とが分かり合うために、互たがいの心の中を見通みとおし合う必要ひつやうなどあるのだろうか？」と哲学は問いかけます。ひよつとしたら、互たがいの心こころをありありと見通みとおすことなんてできなくてかまわないのかもしれない。互たがいの気持ちを本当には見通みとおせないまま、それでもいつしよに過すぎし、いつしよに何かをする、それこそが私たちの目指すべき「分かり合い」なのかもしれない。だから、ひよつとしたら他人の気持ちを分かるといえるのは、その人の心の中をのぞき込むことではなく、その人といっしよにやっついていくことなのかもしれない。そんなふうになると、どんな気持ちでいるのかはつきりとは理解りかいできない友達と、それでも分かり合う方法はうほうが見つかるかもしれません。相手の心の中を知るためではなく、相手といっしよにいるために言葉を聞く。言葉はきつとそんな分かり合いのきつかけなのではないでしょうか。

ただ、言葉は万能ばんのうではありません。私が友達ともだちに、教師きやうしに、親おやに、きょうだいに「もつとちゃんと私のことを分かってほしい。」と思おもい、言葉を投げかけたいと思おもっても、そもそもそのための言葉が見つからないこともあります。私は子どものころ、どんな性別せいべつの子にも恋こいをする自分に気づいたり、周りから言われる自分の性別せいべつに居心地いこちの悪わるさを抱いだいたりしていましたが、当時はそのために苦しむことがあつて

も、それを語るための言葉を知らず、何も言えないままに頭が痛くなったりいらしたりしていただけでした。当時の私と同じように、「相手と分かり合おうにも、そのきっかけとなる言葉がそもそも分からないから、ただいらいらしたり泣いたりするしかないのだ。」と感じている人もいるでしょう。そしてそんな人たちはきつと、周囲から「何を考えているのか分からない。」や「あなたとどのようによつていけばいいか分からない。」と言われたりすることもあるでしょう。ほかの人と分かり合うことがどうしてもできないと感じ、そんな自分を責めたくなくなることもあるかもしれません。

そんなときには、まずは先ほどの哲学的な悩みを思い出してください。ただし、さつきとは逆向きに。「言葉を尽くしても私の気持ちは伝わらない。」ではなく、「言葉では伝えられなかったとしても、そこに私の気持ちは確かにあるのだ。」と。たとえ言葉が見つからなくても、そのために周囲の人と分かり合えなかったとしても、あなたのその気持ちは間違いなく本物であり、そのどうしようもなく抱いてしまふ気持ちについて、自分を責める必要はありません。あなたはただそう感じているだけなのです。

そしてまた、今ある言葉が全てではないということも、頭のどこかに置いておいてください。今は言葉が見つからないかもしれない。けれどこれから先、新しい場所に行き、新しい人と出会う中で、きつとあなたは新しい言葉を知り、他人との新しい分かり合い方を身につけていきます。ひよつとしたらそのようにして、以前には見つからなかった言葉を見つけれられるようになり、以前にはできなかった仕方でほかの人と分かり合うようになれるかもしれません。私はそうでした。

自分の気持ちについて、他人の気持ちについて、気持ちと言葉の関係について悩んだときには、「こんなことを言っている人がいたな。」と思いついてもらえたらうれしいです。

三木那由他 哲学者。専門は現代分析哲学、言語哲学。著書に「言葉の風景、哲学のレンズ」などがある。

絵 akira muracco

# しおり ライブラリー

読んでいた本からはなれるときに  
ページにはさむ、しおり。  
「青いスピン」の「スピン」もまた、  
本に付いているひものしおりのこと。  
では、スピンの付いていない本には、  
何をはさんでおこう？

あなたのお気に入りの  
しおりや、本に  
はさんでいるものを  
教えてください。



応募フォームはこちら

## しおり01

書店のしおりやショップカードを  
はさんでいます。並べて見てみると、  
それぞれのお店の個性が際立ちます。  
お店で買った本にはさんで置いて、  
後から本を開いたときに「あのとき、  
あのお店で買ったんだった。」とふ  
と思いつく瞬間も好きです。

(編集部・A)



左・恵文社一乗寺店、上・蔦屋書店、中・ポ  
ルベニールブックストア、下・えほんてなブル、右・  
本屋itoito

## しおり02

ステッカー、展覧会のチケット、  
カフェのショップカード、おみくじ  
などなど。どんなものでも本にはさ  
んでしまえば「しおり」になります。  
おすすめは、本の紙より少し厚みの  
あるもの。どこにはさんでいるのか  
が分かりやすいです。(編集部・S)



左・宇野亜喜良展のチケット(展示は終了しまし  
た)、上・カフェ mooのショップカード、下・イ  
ラストレーター 100%ORANGÉのステッカー、  
右・おみくじ

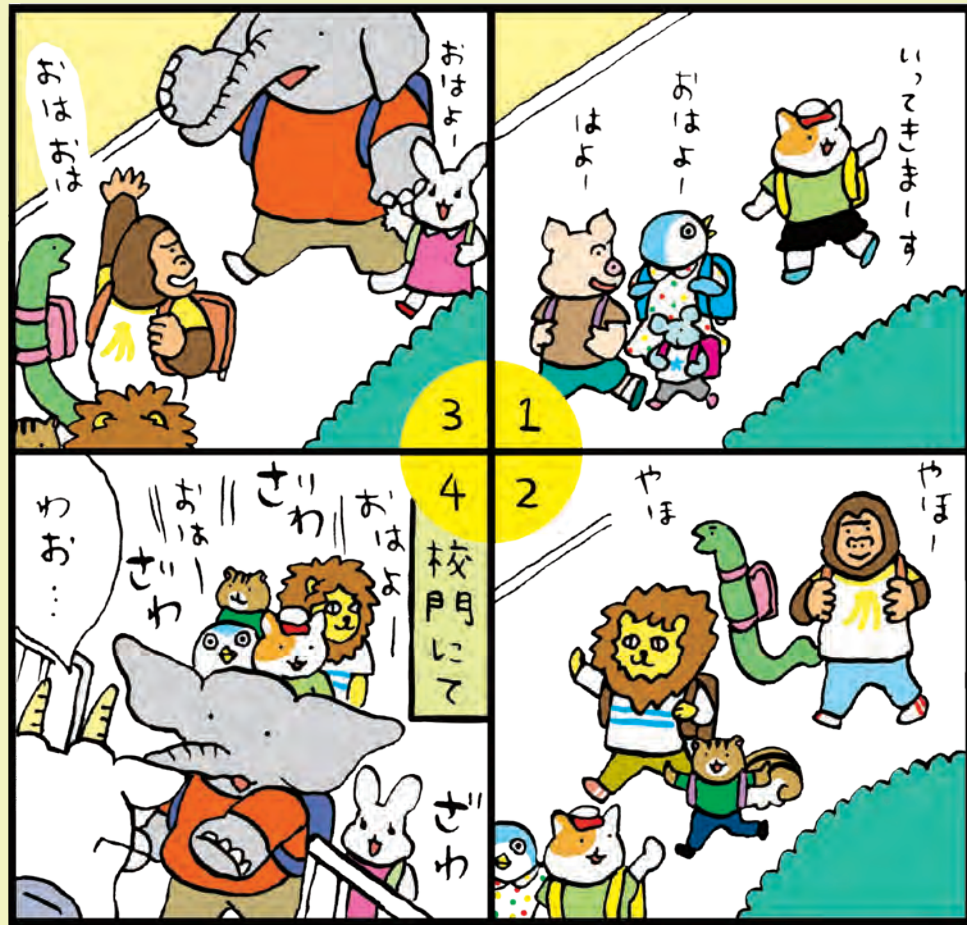
## しおり03

読書記録をつけたけれど、記録用  
のノートを持ち歩くのはちょっと  
……。そんな気持ちで始めたのが、  
小さなルーズリーフのしおり。本を  
読みながら考えたことをメモしてい  
くと、読書記録にもなる、私だけの  
しおりの完成です。(編集部・K)

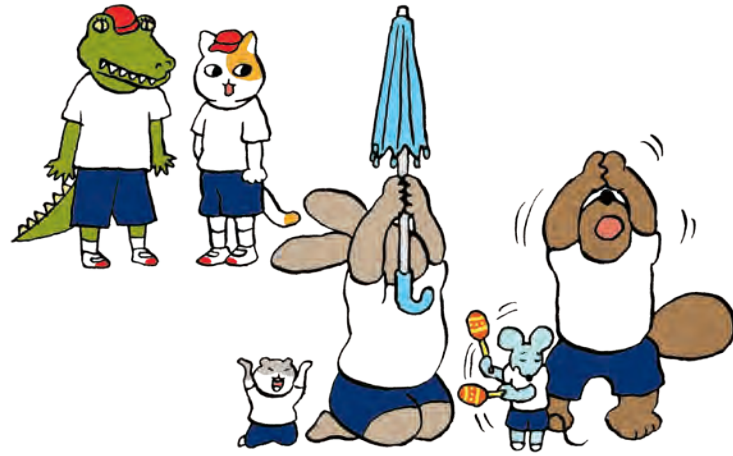


「宙わたる教室」伊与原新(文藝春秋)

しゅうだん じゅうたい  
集団登校で渋滞が起こりがち。



じきょうそう  
持久走の日は、  
雨が降らないかなと祈っている。



プールでくちびるが  
むらさき  
紫になっている人がいる。

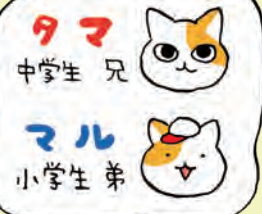


学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしょうかいします。

# 学校あるある

第五回！

伊藤ハムスター



みんなの  
「あるある」  
大募集！



「これって、私たちの学校の『あるある』だよな？」  
そんな出来事を、全国の友達と共有してみませんか。  
あなたの学校やクラスの「あるある」が、「青い  
スピル」に掲載されるかも!?

- みんなが共感できそうな「あるある」や、おもしろい「あるある」は、イラストにして、「青いスピル」冊子・ウェブの両方に掲載します。
- ペンネームもいっしょにしようかいます。す。「ネコのしっぽ大好き」ペンギン博士など、自分で考えたユニークな名前にしてください。
- 自分や友達の名前、学校名が書かれている「あるある」やペンネームは、掲載できません。個人情報を想像させる内容は、ふせて発表させていただきます。

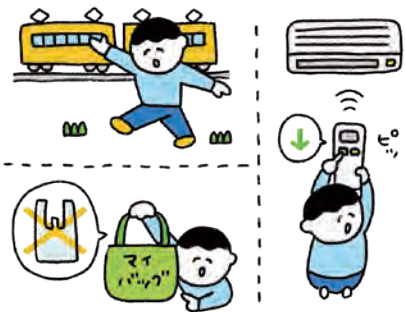
投稿は  
こちらから！





今日から私たちにできること

1 環境に優しい取り組みを実践する



買い物でついついレジ袋をもらってしまったり、近いきよりも電車やバスに乗って移動してしまったりすることはありませんか？ こうした行動を見直すことは、温室効果ガスの排出量を減らすことにつながります。無理のない範囲で実践し、ほかにもできることを考えてみましょう。

2 さまざまな発電方法に関心を持つ



企業などでも、環境に優しい方法で発電する研究や設備の開発が進められています。ニュースなどで見聞きしたら、発電に使うエネルギーや発電の仕組み、発電量などについて調べてみるとよいでしょう。

環境に優しい取り組みを行う企業

日本航空(JAL) 地球に優しい新しい航空燃料



廃食油の収集からSAFの活用まで  
\*SAFの正式名称はSustainable Aviation Fuel

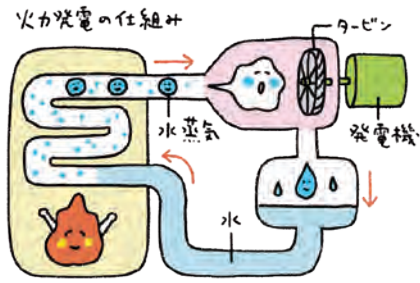


スーパーマーケットでの廃食油の回収

日本航空は、環境に優しい、持続可能な燃料(SAF\*)の製造に取り組んでいます。横浜市や地域のスーパーマーケットと協力で、家庭から出た廃食油(料理などで使用した後の油)を回収する取り組みを行っています。SAFは石油などを原料にしたジェット燃料よりも、製造時の二酸化炭素の排出量を減らすことができます。日本航空では2030年度までに、使用する燃料の10%をSAFに置き換えることを目指しています。



SDGsについて学べるサイト「EduTown SDGs」でも、日本航空の取り組みを紹介しています。



火力発電は、化石燃料を燃やして水を熱したときに発生する水蒸気(水)の力でタービンを回しています。タービンが回することで発電機の軸が回り、電気がつくれます。

生産・採掘ができるかを示した数値を可採年数といいますが、石油の可採年数はおよそ53・5年(2020年末時点)、石炭の可採

地球温暖化やエネルギー問題を少しでも解決するために、例えば、買い物に行くときにマイバッグを持参したり、歩けるきよりなら電車やバスの使用をひかえたり、冬の時期には暖房の温度を下げたりす

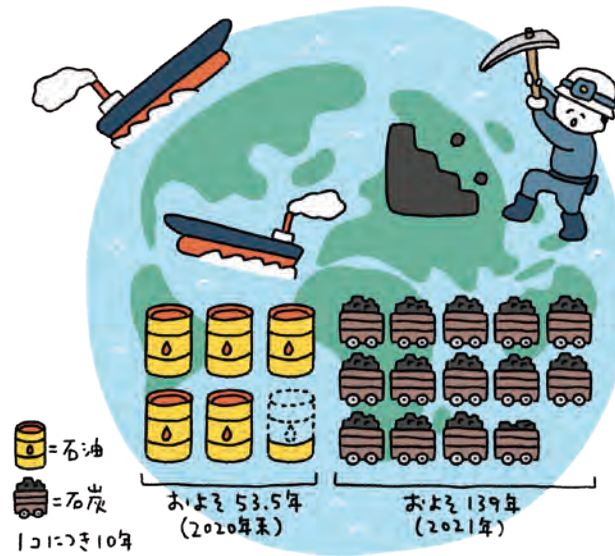
エネルギーを少しでも長く使うために

年数はおよそ139年(2021年時点)といわれています。火力発電で化石燃料(石油や石炭などの燃料資源の総称)に依存している日本は、再生可能エネルギーを使った発電を増やす必要があります。

省エネルギーにつながります。一人が省エネルギーを意識することで、エネルギー問題の解決が見えてくるのです。

また、無駄の少ない、効率的なエネルギーの使い方について考えてみるのもよいでしょう。例えば自宅でお湯が必要になったら、ガスや電気などでお湯をわかす方法が考えられますが、太陽熱温水器という装置を使えば、太陽光のエネルギーだけでお湯をつくることができます。お湯をわかすのに必要なガスや電気を別のことに使えるので、省エネルギーにつながります。

石油と石炭は、地球にあとどれくらい残っているのだろう？



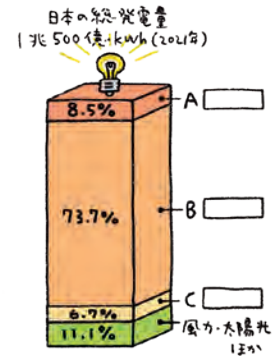
みなさんのおじいさんやおばさんになるころには、地球から石油がなくなっているかもしれません。\*

出典:資源エネルギー庁『エネルギー白書2022』

右下のグラフは、2021年の日本の発電量の内訳を表しています。空欄A~Cには火力発電、水力発電、原子力発電のうち、それぞれの発電方法が入るのか、予想してみてください。

日本のエネルギー問題

正解は、A・水力発電、B・火力発電、C・原子力発電となります。日本では発電量の7割以上を火力発電でまかなっていることになり、火力発電は、石油や石炭があれば必要な分だけ発電できるので、安定して供給できるメリットがあります。地球温暖化の原因となる温室効果ガスを多く発生させるデメリットがあります。



出典:国際連合『2021 Energy Statistics yearbook』

目で読むSDGs かん鑑

エネルギー問題の解決に向けて、できることを考えてみよう！

日本は、石油をはじめとする燃料のほとんどを輸入にたよっています。私たちの生活に欠かせないものですが、輸入にたよるより続けてもよいか、考えてみましょう。

生活に必要な電気と発電

みなさんは、ふだん生活している中で、なくなったら困るものは何ですか？ スマートフォン、お金、友達からもらったプレゼント……いろいろ挙げられると思います。もし生活から「電気」がなくなったらどうでしょうか。夜になっても部屋は暗いままでし、スマートフォンも充電できません。電気がないとほとんどの人が困ってしまうのではないのでしょうか。

では、「電気」はどのようにつくられているのでしょうか？

日本のかかえる問題として、外国と比べてエネルギー自給率が低く、多くの資源やエネルギーを輸入していることが挙げられます。そのため、戦争・紛争や災害などが起こって国際情勢が不安定になると、エネルギーを安定的に確保できなくなるおそれがあります。また、石油や石炭の埋蔵量には限りがあります。あと何年にわたつ

\*1 再生可能エネルギーを使った発電方法に、水力発電をふくめる考え方もあります。  
\*2 時間の経過とともに可採年数が減るわけではありません。新しい油田が開発されたり、採掘技術が進歩したりすると可採年数は増えます。

プロフィール

名前

Bernardo Hitoshi Uehara Barbosa  
ベルナルド・ヒトシ・ウエハラ・バルボザ  
(小学5年生・10歳)

好きなこと

柔道、バレーボール、卓球

好きな教科

体育、地理、理科

習い事

柔道

好きな食べ物

ポップコーン、ホットドッグ、スナック菓子、肉だんご、ピザ

行ってみたい国

日本! 最近、おばあちゃんが日本に遊びに行きそうだったので、ぼくも今度いっしょに行きたい。ぼくのひいおじいちゃんといっしょにおばあちゃんを日本人なんだ。

地球のために

ふだんやっていること

ごみのリサイクル、食べ残しをしない、水の無駄づかいをしない。

日本について知っていること

大好きなアニメ『NARUTO(ナルト)』のテーマパークがある。

将来の夢

柔道の先生。バレーボールか卓球の先生もいいな。

ベルナルドさんの1日

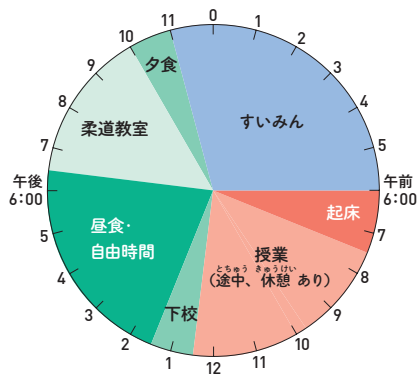
**午前6:00 起床**  
起きたらまず顔を洗って、着替えます。朝食は食べずに家を出て、6時30分発のスクールバスに乗ります。

**午前7:30 授業**  
スクールバスを降りたら、学年ごとに校庭に集まります。全員そろってから、先生といっしょにクラスに向かいます。一つの授業は45分。日本の学校のような短い休みはなく、トイレに行きたくなったら授業中に手を挙げて先生の許可をもらいます。写真は、学校で行われた薬物と暴力反対の教育プログラム「プロエイド」の修了式の様子。



**午前10:00ごろ 休憩**  
午前10時ごろに、15~20分ほどの間食休憩時間があります。ぼくは、お母さんが持たせてくれるパックのジュース二つとパンをよく食べます。

**午後12:30ごろ 下校**  
**午後1:30 昼食・自由時間**  
両親が働いているので、帰りはスクールバスでおばあちゃんの家へ送ってもらいます。お昼ご飯を食べて昼寝をして、その後は宿題をしたり、テレビを見たり、いとことカードゲームをしたりして過ごします。



**午後6:30 柔道教室**  
柔道は2年前から習っているよ。午後6時ごろにお父さんがむかえに来て、連れていってくれます。大会に参加して、メダルやトロフィーをもらったときはすごくうれしかった! 今は灰色帯で、黒帯を目指しています。いつかオリンピックに出たいな!



**午後10:00 夕食**  
帰宅してすぐ夕ご飯を食べます。この日は、ソーセージパスタとオレンジジュース。ぼくは、白米、フェイジョン(豆のにこみスープ)、野菜、ソーセージ、チキンソテー、肉だんごなどをよく食べるよ。



**午後11:00 就寝**  
シャワーを浴びて寝ます。



柔道に夢中のベルナルドさん。黒帯を目指して、毎日練習にはげんでいるよ。

世界の友だちの1日  
ブラジル  
サンパウロ州  
サンパウロ市

大好きな柔道で活躍!  
将来は柔道の指導者になりたい!

ブラジルといえば、世界屈指の「サッカー王国」。ブラジル代表の試合がある日は、街から人がいなくなる。と言われるほど、子どもからお年寄りまで、みんな夢中になってテレビの前で応援するよ。格闘技も人気で、なかでも日本から伝わった「柔道」は多くの人に親しまれているんだ。サンパウロ市で暮らすベルナルドさんも、平日は毎日、柔道教室に通って練習に打ち込んでいるよ。

「先生の指導は厳しいけど、そのおかげでみんな規律正しく頑張れています。息子はオリンピック選手だし、ぼくにとっては世界一の先生です!」

ベルナルドさんは、小学5年生。毎朝、7時に登校しているよ。日本より授業開始時間がだいぶ早いのは、ブラジルでは多くの学校が、「午前」か「午後」のどちらかを採用することができる2部制を採用しているから。

「最近、薬物のこわさを学ぶ特別授業があったよ。警察官の先生が来て、「薬物反対」の歌をみんなで歌ったんだ。プログラムの合格証をもらえて、うれしかった!」

正義感が強く、他人を思いやる気持ちにあふれたベルナルドさん。将来は、柔道の選手として活躍して、指導者になることが目標だよ。

「教科書がとっても重いから、みんなキヤスター付きの通学かばんをガラガラと引いて登校するよ。」

ブラジルの教科書は、問題集といっしょになった書き込み式が一般的で、とにかく分厚い。A4サイズで4~5センチもある教科書もめずらしくないんだ。ランドセルではないのにも納得だね。

「教科書がとっても重いから、みんなキヤスター付きの通学かばんをガラガラと引いて登校するよ。」

ブラジルの教科書は、問題集といっしょになった書き込み式が一般的で、とにかく分厚い。A4サイズで4~5センチもある教科書もめずらしくないんだ。ランドセルではないのにも納得だね。

「教科書がとっても重いから、みんなキヤスター付きの通学かばんをガラガラと引いて登校するよ。」

ブラジルの教科書は、問題集といっしょになった書き込み式が一般的で、とにかく分厚い。A4サイズで4~5センチもある教科書もめずらしくないんだ。ランドセルではないのにも納得だね。

世界の友だちは、いったいどんな1日を過ごしているのだろう。放課後は日が暮れるまで外で遊んでいる? それとも塾で勉強しているのかな? 今回はブラジルのサンパウロ市に住む10歳のベルナルドさんにお話を聞いてみました。



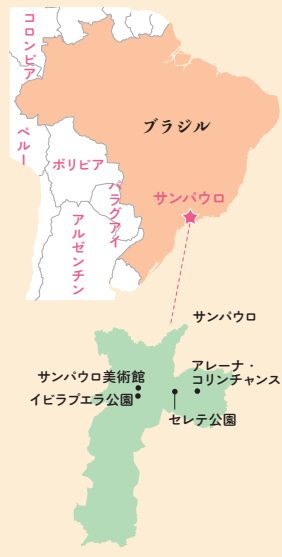
サンパウロ州  
サンパウロ市って、どんなところ?

面積 およそ248,219km<sup>2</sup>(サンパウロ州)  
およそ1,521km<sup>2</sup>(サンパウロ市)  
人口 およそ4,414万人(サンパウロ州)  
およそ1,145万人(サンパウロ市)

ブラジル南東部に位置するサンパウロ市は、東京都とほぼ同じ人口を有する南米最大の都市。サンパウロ州全域でコーヒーづくりが盛んで、市内にはコーヒーショップも多い。日系人も多く暮らしており、毎年8月には「沖縄祭り」が盛大に開催される。



「フェスタ・ジュニーナ」(左)。トウモロコシで作った生地をトウモロコシの皮で包んでゆでた「パモニャ」などを食べるよ(右)。



ポルトガル語の「こんにちは!」  
**Olá(オラ)!**

ポルトガル語の「ありがとう!」  
男性:**Obrigado(オブリガード)!**  
女性:**Obrigada(オブリガーダ)!**

「サンパウロ」は、ポルトガル語で「聖パウロ」の意味。「聖パウロ」は、キリスト教における聖人の一人だよ。ブラジルでは、人口の約9割がキリスト教信者なんだ。ベルナルドさんも毎週日曜日にお父さんといっしょに教会に通っているよ。

毎年、6月から7月にかけてブラジル全土で開催される「フェスタ・ジュニーナ」は、3人の聖人を祝福するお祭りだよ。たき火をたいて、妻わら帽子に穴の空いたジーンズといった田舎風の服装でフォークダンスをおどるのが定番。トウモロコシや落花生を使った料理を食べてお祝いするんだ。

参考 ● (面積・人口) ブラジル地理統計院 (2022年国勢調査)

書き下ろし最新刊!

朝比奈あすか・著

いつか、あの博物館で。  
アンドロイドと不気味の谷



あのとき、漠然と、そして、  
たくさん、不安に思っていたこと……  
自分ではどうしようもない、このはがゆい思い。  
そんな子どもたちの心に寄り添って  
くれているのが、この作品だと思います。  
中学生だったあの頃の自分に、  
ぜひ、読ませたい! そんな作品でした!

全国書店にて  
発売中!

お問い合わせ 東京書籍出版事業部  
〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1  
TEL:03-5390-7531 <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>

芳林堂書店 高田馬場店 江連聡美 さま



WEB青いスピ

朝比奈あすかさんの  
過去掲載作も読める!

左の二次元コードか、以下のURLからアクセスしてください。  
<https://bluespin.tokyo-shoseki.co.jp>



読者アンケート

第5号の「青いスピ」でおもしろかった作品や、  
これから取り上げてほしいことを教えてください。

※インターネットの通信費がかかります。

青いスピ 第5号  
(2024年 秋)  
2024年9月1日発行

発行者 渡辺能理夫  
発行所 東京書籍株式会社  
印刷・製本 株式会社リーブルテック

本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1  
Tel:03-5390-7445(営業総轄本部) Fax:03-5390-6012  
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666  
東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581  
名古屋 052-950-2260 大阪 06-6397-1350  
広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536  
鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084  
ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>  
東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>

東京書籍

表紙絵 浮雲宇一  
アートディレクション 山田和寛(nipponia)  
デザイン 山田和寛+竹尾天輝子(nipponia)